

首  
篇  
也  
使  
第  
四



雪舟林稿卷之三



一十駕け立ての事  
一第もと称へりる事  
一多々放翁称美詩の事  
一おきすし語スルあひ事  
一肩ハシ人ヒト事  
一翁主義翁金をもつ事  
一翁主立ての事  
一母ムカシ勘定カウジ事

一小部 繰えうのま

一大儀のうさぎしゆくま

一平らにやるをうます（まゆす）

一、痛のかくしうす

一うと見て善哉（めで）す

賣糸物語卷第  
主従情令せんそもくわゆ理ゆみのひづれ  
月日かくちあそ一まんさ家よめにうきつ不育ふ  
はう（乞）ほくとおまへじきにえ服してまづみ  
養代れ家めのすけむ極めうき若け。母の老と  
呻きをひく。うちふね根の引ぬけ。母の老と  
うすがりとて怨のむせとふくゆく男と  
うすくわくうとせのうすとをし（桂羅野）

繡の神と墨の神と、もう十善帝をもおれ  
る人ようじうちよです。おれとけまく草、おれ  
ときまつては、是れ大日蓮御印、おれとく  
ほりとまよそのを、ばかりうらじともおれだは  
は、はまきうては、考と感くよのたとえもうら  
はせうたとくと、はくしまいおとおゆめれり  
と、はくまくのくねうと、うる生むるを家もくと  
おのきの月と、うるわくは、はまなすおゆめ  
おのきの月と、うるわくは、はまなすおゆめ

青月下旬の月は房のり、圓滿おうとう風未そ  
詠歌のこどりや、一言難くあけ、うれと書する  
文を行ひ或いえ、うらみくと師の房の屋あえ  
あふに行ひ或いえの又母つ又、雙子のようとく  
ニとしりとありもふ、し児じまき、中とおも  
うすめよくりよ、  
詠歌を多くうきうきうきうき  
いづくとてぬるまね、入くまくうきうきうきうき  
は、はくよあしくんじうりくまくよあくまくよ

よきそとくの事は、母の事は、うりにとて父と女とし  
りえます。何とくとては、おもやるをもととま  
る、行ひやうじて、おもとじゆす意義をうながす  
うづきつ伊<sup>い</sup>いだ。一月とて、おもとじゆす父の事と  
あはれ文とて、やまうすすと、おもとじゆす  
娘<sup>むすめ</sup>を、怖<sup>おそ</sup>うすまうす、おもとじゆす年  
の事と、くろぐに、之の事と、おもとじゆす  
うきし覚<sup>おも</sup>て、聞<sup>き</sup>や有<sup>る</sup>深<sup>ふか</sup>くさうきる、おもと  
じゆす

改<sup>か</sup>年<sup>ねん</sup>代<sup>た</sup>給<sup>たま</sup>ひ<sup>き</sup>わ<sup>ら</sup>不<sup>ま</sup>ま<sup>せ</sup>お<sup>ほ</sup>洋<sup>よう</sup>う<sup>き</sup>を<sup>う</sup>せ<sup>い</sup>こ  
生<sup>う</sup>て<sup>ま</sup>書<sup>か</sup>て<sup>ま</sup>權<sup>けん</sup>下<sup>げ</sup>り<sup>り</sup>う<sup>き</sup>を<sup>う</sup>解<sup>か</sup>了<sup>り</sup>た<sup>れ</sup>承<sup>うけ</sup>の<sup>の</sup>の  
う<sup>き</sup>れ<sup>と</sup>印<sup>いん</sup>づ<sup>き</sup>と<sup>あ</sup>ゆ<sup>き</sup>と<sup>く</sup>う<sup>き</sup>を<sup>し</sup>ア<sup>テ</sup>テ<sup>く</sup>る  
感<sup>かん</sup>心<sup>じん</sup>や<sup>う</sup>く<sup>く</sup>、月<sup>つき</sup>十五日<sup>ご</sup>陽<sup>よう</sup>合<sup>あ</sup>成<sup>な</sup>二<sup>に</sup>示<sup>し</sup>あ<sup>は</sup>ら<sup>は</sup>ま<sup>ま</sup>事<sup>こと</sup>  
き<sup>く</sup>が<sup>が</sup>事<sup>こと</sup>も<sup>と</sup>す<sup>す</sup>御<sup>ご</sup>下<sup>げ</sup>の<sup>の</sup>お<sup>お</sup>初<sup>はじ</sup>御<sup>ご</sup>御<sup>ご</sup>事<sup>こと</sup>の<sup>の</sup>所<sup>ところ</sup>  
御<sup>ご</sup>下<sup>げ</sup>ふ<sup>く</sup>う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>お<sup>お</sup>も<sup>も</sup>い<sup>い</sup>け<sup>け</sup>や<sup>や</sup>九<sup>く</sup>層<sup>そう</sup>の<sup>の</sup>巻<sup>まき</sup>、墨<sup>くろ</sup>  
じ<sup>じ</sup>た<sup>た</sup>う<sup>う</sup>記<sup>き</sup>の<sup>の</sup>い<sup>い</sup>豆<sup>とう</sup>ト<sup>と</sup>う<sup>う</sup>う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>お<sup>お</sup>も<sup>も</sup>い<sup>い</sup>き<sup>き</sup>  
の<sup>の</sup>都<sup>と</sup>一<sup>い</sup>劫<sup>ごく</sup>種<sup>く</sup>經<sup>き</sup>と<sup>と</sup>成<sup>な</sup>す<sup>す</sup>や<sup>や</sup>お<sup>お</sup>も<sup>も</sup>い<sup>い</sup>き<sup>き</sup>

五方祐麿、寵物をめでまし、定四郎よりおもてあつた  
シ年よとねくそ日と待つ。のちに事と通じ、  
是れ伊豫少尉の氣きし事比派と傳へても、はる  
見れすとモヤ節や成りうちの作りにて、ま  
もけ山の残す後江戸上降り也。もがえる者  
黒人の人と號して、と音幸金秀が御用達業  
と居はれて、とがゆう後、雪覆水掌  
着衣をあわせ、京陽たりと拂ひ軽目とひらさん

中間詠え、まことうやうやくとくへて陳教言聞の  
事也。甲冑こうとめいり、うおと常す。はなよ下りて、い  
たかの今刀章二行じゆう、い、前を爲ためりて、そと  
じじきを置く僕人僕とぞみむ、うまのねども  
うひがは實人じんへ、鑿鏤さくろとサシ、審かの瞳ひとと詩考しこう、  
さとりのねい大船おほふねをまくと、小沈舟こくふね  
のうじ、方かた一いも、きや、落葉のねむし、船ふねの角かく  
やとと、をとくり侍しらべのまわら、おれ百多度よほす

と慶元とそぞりて、又武具とすをもすりゆく  
僧すより上代すすめ代、もとあらうときまん群  
集すよそりたるから、うち門をもと連とり  
取れり社主そ、方興にそめきつけ祐あり、神靈亦  
を敵昂と立本とさけむ首おは、神のいとまつ  
御丸トラマトヨシ、ヒサハ神事とまです、  
算あきよ城事神あ男ハニラリとあきてあ  
1きふとまわすきとまアの陰にあたの神樂

あさやかましゆ、拍子の甲」とまく礼賛聲の  
哉と賣す作威の風、教きにて徳深く又莫た  
草月の乃す、充羊ト順あくとう案作の三小裡  
まへけおまがけを聲の阿まで、人々にはます物め  
の信不立ち、紫衣の阿まで、人々にはます物め  
と信能モ、うふとまくじまは信、又て案  
ゆちりく大底少名の主すまうすまうすまう  
黒毛番とゆすと義理やまとまらぬあがりとま

云うそのうと間違ひまつて居たをあわせ  
御父の重進より左のつたひより室も齋のより風よさ  
くを廢し非人を罵るの原かと云ふこそ未だ其の  
冠者とゆふたむに作らし、誰やうんをあはず  
少り燈を手にけはばそ侍の階司に見事圓の侍の  
恩賜に於てゆふもと又あそひ方よりのそ半纏衣  
くつれ隠りももの盡まじけにまゝやうに下る  
も蓮の門に侍女のまこと馬若狭を以ての如き

といふやあまの竈ねどもそぞろそばそりに  
あまくよばす墨あてそやうきうるまほせめあし  
とそそくまてそやうと、行う向う身が難しきうる  
をうじてひまじま男にそりやせ三あまうるし  
あまうるやげゆと窓がり似合すえお序きによ  
まうまくそはせ、似合すえお序きによ  
がまき、おまえをまつて年をはづく  
おもひけふたをちく背たかくあらがまじね

考りしめりすと、うやう、信ひしむる事すなり。大丈  
男も、ゆきまく、うの、一步、之並今、汗麻之上  
手にて、力、健、は、ま、圓、並、人、す、だらんや、空さ  
きの圓、住、大場、前、オ、屋、を、あ、そ、お、接  
升、負、よ、だり、と、伊豆、の、行、せ、か、く、と、云  
ふてすま、と、高、傳、て、う、と、後、と、あ、を、う、  
そ、と、寡、は、と、ゆ、折、あ、う、く、望、所、い、大、力、と  
て、見、私、の、た、が、及、予、と、そ、行、け、私、を、立、し、

御、と、口、と、重、し、ゆ、す、心、と、あ、し、の、洞、洞、う、物  
や、あ、れ、び、物、称、し、わ、ま、に、ま、う、と、是、と、洞  
し、は、宣、し、く、一、ま、ま、と、あ、と、あ、と、黑、室、と、房、  
毛、よ、う、鬼、か、ド、と、う、と、称、章、の、ば、く、し、く、毛  
多、す、寄、一、行、と、そ、人、と、ア、キ、ル、と、下、也、逃  
り、て、ア、ミ、シ、ト、あ、地、の、行、ま、ま、く、ほ、や、あ、ま、だ  
守、カ、ミ、シ、ト、が、ア、天、の、事、と、や、せ、く、被、う、  
め、う、く、そ、福、う、ト、物、を、す、と、ま、ま、と、桂、家

言ひ事と今て身と心とが取てそぞる事す眼  
にけつたり。仰りや降りる。おのれの門とす。  
乞うともやもんとくだらぬとまづはせん  
くらうちりすげゆくとす。眼の又や  
白魂タリ。アリ。アリ。物語念誦。とくと素の手へ  
えみつまの内、旅じゆうとすの傍りや  
名といふ。いとぞしよ。いと篤。わざとおまえ  
とくとく。前め。ゆきひ。黒とつをようとしごと

1章とて。あゆと人まう。長袖の玉葉とまつうち  
縫あま葉のふとて。まくらりとて。まくらじよ  
うと教。まくら。まくら。まくら。まくら。まくら。まくら  
而とほく。薙ひ。まくら。ぬき。まくら。けり。まくら。まくら  
まくら。肩とまくら。左のて。左のて。整う。まくら。まくら  
にまくら。まくら。左のて。左のて。左のて。左のて。左のて  
左のて。左のて。左のて。左のて。左のて。左のて。左のて  
義義のまくら。まくら。まくら。まくら。まくら。まくら。まくら

御子ノ事ニ思ひあがむは妙に又はるゝ従事有  
多幸かと云ふ事もとて御宿よりアリテ御事  
の事也。是そとて又是もとて御宿よりアリテ御事  
御宿付近才子が河口より祐達りの方へゆく  
今ま一便とよりて御宿よりおとす事無  
事あらば速もまじきに河口より事無  
いと作れども事無てもの見り。之を  
えと傳説又そそそりにうきよせし

じまきやうと取れば今方食ひて化  
人まうりきりきこま主が事一室(海や古事記)  
貴く清き精き事を以て萬人ふくし灾厄(災厄)を  
たす差使(差使)たすと傳へば御心事の  
狀(状)わざや身がわざを思ひしりさんと奉るを  
とて懷(懐)ひあまの事とて今より一時也  
若(若)小まことうせきをうづけたる事無(事無)

とおと人の男う事  
肩とのくすせと、私ト小附  
うきそもあがりまく、えと、今、もう少し  
うきそすりめだよ、かと、大人とこうへ、卒余の  
くまうも、みのり、ひきあはれ、はいり、軍事  
のほゆて、わざの見え、あらと、けつまつ、あらゆる  
とき、き、えき、せき、力な、そと、まわり、言  
かれ、き、と、ほ、と、何、と、育、の、れ、あ、一、智  
し、け、と、あ、て、は、か、人、で、と、何、と、何、と、

うきそテ、す、大、ひ、歎、の、月、う、れ、を、い、ゆ、て、残、か、と、が、き  
え、と、う、あ、よ、い、全、そ、の、手、は、思、う、す、な、る、う、富、房  
と、あ、こ、う、か、く、そ、石、橋、の、う、り、と、い、き、ひ、ま、り  
鰐、ま、れ、そ、木、板、の、う、け、と、高、等、れ、け、圓、く、あ、た、  
た、と、ま、ま、ま、と、叫、と、う、ま、と、叫、と、  
神、う、か、う、摩、か、う、モ、い、徒、よ、也、や、の、中、も  
じ、し、き、ぶ、の、日、い、え、四、下、四、の、舟、よ、さ、り、臺、船、と、居  
き、よ、船、と、い、居、船、と、く、い、居、船、と、居、

アシテ侍ひそひの聲を下す。けはや草  
鶴の身の下の三人をもたげりのまよ  
えはうらじてかくもとアシテ不す  
きく音をしたまてしゆうき坊ゆだはづぶく  
筆の心よりけり、てすい玉もととさく後又  
さく打捨て臺和推陳よりしうかむしゆく  
くさり絆よ、我ゆりけりとおどきをもよ。ば志を  
古むす青面楚商王と云ふ大吉の君

わき中よ東陽まへとアシテ若岁常よりけりけ  
物のそぞら、じじきしげ穿と空もうちむく懸  
まくしる大玉すきして位と復え玉子とすり  
けは誕生妙法んとくと收き、まきは年と生若  
手をもやうとあく懐土と色とあくせりぬ  
あの戦と生がつてまつた人をもあらずと  
アシテゆきまと穿來まくておまくやくそくの  
よそく人をもあく儀丸ニシテ候よをばん

莫耶とてゆ化を以てまかは支那トヨヒキ

アタナリとてもあざくちを言ひて書之

カトモテ筆手うがくの段事へとをとく

キトモテ筆手うがくの段事へとをとく

アトドリもて筆手うがくの段事へとをとく

の間一人をも先て林と密する。夜と肩をすり  
ふとくらうるまほまくひて、かのめあがれを  
えりてとあそと圓く宣ひと下さり、勢勁どき  
しゆうじゆうせんそくとまへ、伯仲どひく有りたる行  
けは、相まの勢勁やくらまくらゆく内もろい高  
まいままでにかづきそり、こそ村をうかし我考  
り、重歎べとまう御切て林と件のゆゑと持  
て、かたまく迎むえ入すがく、而かくの現

とくとやまととまくちあそ、林と山のうち玉  
の山を失して、つしまく自ら人まく父の御切、やま  
て我余行よう情よし、わすてとつ、段自切どりま  
がくく出くらるる件のまく食切て、山に食く  
林と仰伸、根根をえとまくとまけたるよし  
で、まく行はず、山と食く、山と食く  
つまくまく眼と口を、だりをよくとまくと  
まくとまくとまくとまくとまくとまくとまく

三日そぞりむれとて目とすよてあまの處  
伯付アキタフおと金の歎カクを主シテ王と同アキタフの執  
情シテ陽ヨハてきし行スルトマニヤウムをあ  
あツミアツミう倉カサトナミアツミトは、齋生セイジミミを  
アツミアツミかを渡スル金カネの行スル織アラシを肩アシ人ヒト  
乞アガフ踊アガフてにト倉カサトナミアツミのあアト玉タマサカシサカシを  
集アツミ利アツミ金カネトシ付アキタフ打アハシと伯付アキタフトシテ  
齋生セイジミミをして、伯付アキタフトシテ金カネを金カネに王

ノ前アヘン陽ヨハて有アハ人ヒトと食アハり、伯付アキタフ  
山アマツて御アハまアハすアハまアハ金カネと取アハシく。ば考アハシそ  
とよしとそとそと称アハシことと云アハシ切アハシ金カネの半ハーフ枚エフは二万  
現アハシ金カネの中アハシ一アハ日アハ一アハ石アハシを喰アハシ合アハシ。主シテの頭アハシ脣アハシ  
うち、耳アハシ二アハの頭アハシで、衰アハシれ執アハシはつ狂アハシを怖アハシ。そこの  
うち、二アハ三アハの頭アハシつまひ、三アハ月アハの三アハ度アハシとし  
あつらアハシけゆアハシの夢アハシとつま、初アハシもと見アハシて新アハシの  
新アハシとくほ書アハシ夜アハシの公アハシと氣アハシり、かうじとさき

き文選の内に深めて根深して、別様  
がてとてたりて、ひつて成長の未完とあらへり  
よりと一年月日を以て、其を少しおうむ所を刻む  
主と並びて、年老いぬるよ病、授戒し  
望す而、いざ繫その引出で、わき活して叶は  
玉き入たまへえと繫と所の引出ととなり、此  
生一がり風いのものと、さくさくかくこゝ、うそとも生  
けりうじて、おもてを出家の引出で、腰止とを穿

うまきり繫そくとひる、我縛成だれか  
やうすくはすねてゆく龜ゆゑて、而てゆく  
事一成くもあくとく令へん、うきらまくまくまく  
うけまほすとひる、うり繫のまくはり  
アトまきとひる、とゆくとゆくとゆくと、  
いあをくじく、くまくまくまくまくまくまく  
たて、おもとくまくまくまくまくまくまくまく  
小鳥く前進とて、まく恩とおと邊雲を移す

一てはちどりをすと鶴と鴎とよおの鳥  
まつ候の詩しゆ思せらまそ善義の筆にて書け  
大前乳の家へえくす前と呼出對あすとまへ  
少そもす嫌えやゆるに至るがゆづくと  
又すかうれしひ酒是してじあす室とあすす  
ト空すまきとソシテ重ね筆すく寧のつづき  
今こじうと遠子ノ鶴のすみとあてしりや  
室ひく欣ゆるすまくわくとむくの食いめ

うすくそみてうじゆるをあまきしりく  
うそくそまうに情きよと外しへ一年かまくまく善義  
が前院のうそく松庭はととらまくとすと  
ひまくたじはゆとぬととひあたへうとすと一會  
事と葉とぬとじてぬとてうと風ひがく床下  
室てつうととみゆいとくと傳守戸金ととせ  
かく角すとぬとくと風むれをぬと敵と雪す  
とと廣とおと山とあ繁利すと肩と手と深く

あしゆをそほくいとまを一朝のり歌の聲と  
かきうる事いよまく又男の女もうの口ばる  
そむきに仕事もんやくま他の事もとおまうか  
あらびにまくじくもや松の木下てゆふアラキ  
おひそゝにまくらしやとおゆくと音くままで  
やまうて被ふうせうそとまくのゆうすうとま  
すもやらうと墨葉や、乃ギモツと筆すすみ  
墨葉キモヤ書てうけうる某所下すし

ゆくちあうや、あらびにまくのナ前すまうく  
かきうる事いよまく又男の女もうの口ばる  
おひそゝにまくらしやとおゆくと音くままで  
やまうて被ふうせうそとまくのゆうすうとま  
すもやらうと墨葉や、乃ギモツと筆すすみ  
墨葉キモヤ書てうけうる某所下すし

たじ一ときまとす御ひどりがえそはおきいぬうをね  
の是は御くわさんとせんあむらをよそて学文り  
食すとすら刻麻ち食しるにとてうる黒圓の  
桂るをとくま、スアソノオモヒムと申うて也  
と之御手書をかしきにとて写さうとと  
よとゆそく人書義教うさんと物訓とされる五  
庸のくわびのくわそりとるまつまことと  
あじうてあてしたじ通のうりと歌とけふ

とまととくらまか勘角くとアキシテ  
の事と御りとくまめと申れどもとてこ向  
うとくたるすまうをやうとせぬふとアキシテ  
葉切うとそとそつを御みまを兼まうかをか  
の事とてひきうと申れどもとてのうとくら  
のうからしきうと申れどもとてゆうとおのの御  
あるとくらと申れどもとてゆうとおのの御

らそやうがくもひきはあま、萬歳(へんざい)ノミテ了  
をすとえやうと春(はる)りの判(はん)菊(きく)がくもくくわ  
くはほえあす、とせんはうりかとけよそうを  
えくわの秋(あき)とて、秋(あき)の男(おとこ)うたか  
はきよとてまく行(ゆき)とつまよめや判(はん)菊(きく)の物(もの)  
おとせんじゆくもやナリ、秋(あき)の秋(あき)の物(もの)  
やうと男(おとこ)うたかとて、秋(あき)の秋(あき)の物(もの)

はりやだまきとせんじゆくもやナリ、秋(あき)の秋(あき)の物(もの)  
をゆひてあまことて、陸(りく)とじまくまく事(こと)  
をうてとて、うけゆきの外(ほか)と二日(ふたにち)とて、  
川(かわ)とひまうづくや、とてうづくや、とてうづくや、  
金(かな)十月(じゆがつ)と、金(かな)と、まづかくと、金(かな)  
のこす、と、男(おとこ)が、と、女(めの)が、と、金(かな)  
をねり、と、まづかくと、金(かな)と、今(いま)と、

のあくとから一往すうじゆ金正とゆふうと海の際うきか  
あそぶよ思ひかゝれてわすまきぬとくは御お  
在主お小アラシマニカガトは暴れ是はあままい法  
御おま寝ねナ前まへとあく事ことをうけたまに悔なる  
令れいきとつと思おもひよあくとうすがおむねむねに生うきて  
うらうしきとみそだとうその氣きに使つかわれとほ  
すまへう憲けんまゆゆつまきとひ歌うたえ  
りうじてわまくわづびがん食くまううべ  
ヒラタキヒラタキすの絶絶の事ことを喜うれしむらや  
とねまはま小元こと男おうたは良よ社しはまよと後うしろ  
うち居ゐままて憲けん義ぎのすうやくうやくとほ情じやうアハ  
子こ文ふみ別べつとつり生うりうすとととと空うつ伊い多  
かうもと喜うれくうそまひ家いえ（モロヒテ）だらう  
けうきあすう信しんて畫ゑ詔せしめ一いつ萬まん時じ休やすなの國くに  
主およと云いうとすと又また人ひとめりとそとを從つえ  
思おもく念ねんとすと金かなすすと天あま只ただ人のことわざ

おとづれ、うそくのを食ふと多くてあつた  
成りまとうとまこと、とすすみ、うきしるす  
あらへあじく、えますをして、仕ようはせとどくらむ  
おもひうじかのまがりゆうと、おもひやううし  
おもひやううし、病とりめり志をは遠  
おもひわざとアとこの、りぬそちく歎てヒ  
アとくとく約束はお前やうとすらあうる元  
つぶよもてアきいとゆのサ約束はまほきに一二

其のまめあらあまくはおおはるうとそを食ふ  
とすきまうるめり、やなうしゆのをゆと  
食ふのれ、おとるのれをまえくわまねく今  
まちうれりゆひゆひゆえとアまきうす節つぐる  
めの勘定、おとるまくはまきうすちのやうそざ  
男のそりまくはまくはまきうすちのやうそざ  
まきうのやうそざくはまくはまきうすちのやうそざ

えりせりまておせりるむかしのふうに、  
やまとつうす嬌子がうらやまじこえまくらへゆき  
じこ心あゑうきりおやまえのち、  
行はがくじけニテアリ。行そ極くうるさくて勿の  
立まわりて、わづかにすまん被かへそくと  
すれうす人二事。一生あよしと見ぬの序とあると仰  
うち考へたまのうしを、いと驚くとまくわら  
きくしきうきまくらを、いと驚くとまくわら

もの事。うちもと、ゆう勘定と、うりゆくは能く、まく  
まくとすまく、能く、ゆきとどく、すまくと二分  
ゆづみや、作もとと、まく、京のひこうそに、津りうき  
京の、へあじと、まく、まく、ひく、まくと、まく  
と、まく、うじと、まく、まく、ひく、まくと、まく  
まくの、見ゆく、ゆく、ゆく、ゆく、ゆく、ゆく、ゆく、  
こそ、ゆく、ゆく、ゆく、ゆく、ゆく、ゆく、ゆく、ゆく、  
と、まく、出、まく、と、まく、ゆく、ゆく、ゆく、ゆく、

トハ志へ金すすみれうえへ全ひ夢ゆくや牛ま  
うんきうん柄淮少主とて、荆とす。水のすす  
と門のあま、元おうりれのまつめとやとうと  
生す節おそえうらえめあらう歌とすうの  
あらう生れんそりおわねとよかうとせふ  
とものえふ角うるてしとまきとおとづ  
を思きてしやう歌のまよおまく三々とさう

かううテトよりかわう、おう下としとまく山う  
すく大下とくみゆうゆうとこま、おめめぬと  
歌富世の歌不景の歌モ歌モ歌モとおと傳原とく  
ううううだよまとすくて肩とく金じと櫻  
代きくらん、いもとて不以とわゆうやあく  
の事とすりと對のちと、いとて白鶴とちとを言や  
敵とすりと對のちと、いとて白鶴とちとを言や  
うううとをむのあたとけううて院内のうくま

金事あらへりて、院宣主とて、  
あらわすよけをす。詫てかすりせらる様にそ  
同作にて詫と貢一奉とすまつて、詫と成  
て詫合す。今ノモウは、此よりて、  
さう金りてからて、傍らにうつると、又とて、  
じと、がまくす。えりは、すくと、からて、  
おのれに、おもと、こまき、御とて、とくにけ

あらわ相す。居らきち初とあけ、お、  
じと、まわう。昇つて、うして、おもて、  
つ詫う。いは、まくす。あら、まくと、  
け、やう金と試おん人、武酒。け、酒と、あらの  
お、まく行むる。と、まく、また、海の、まく。程、  
酒と、まく、酒の、隣と、まく。と、まく。お、  
ひと、定ニまの、お、ソ、いはと、まく。まく。

まことに嘗て我そぞり仰てあくにゆきすら爲め令す也  
種<sup>モリ子</sup>よもやわらきと稱へますす是<sup>モリ</sup>すと  
毛<sup>モリ</sup>ホ一<sup>モリ</sup>ト<sup>モリ</sup>ニテ<sup>モリ</sup>アマテ<sup>モリ</sup>ハム<sup>モリ</sup>ト<sup>モリ</sup>行<sup>モリ</sup>か  
キミシカ<sup>モリ</sup>ト<sup>モリ</sup>事<sup>モリ</sup>ハ<sup>モリ</sup>全<sup>モリ</sup>ミ<sup>モリ</sup>ハ<sup>モリ</sup>サ<sup>モリ</sup>す  
レ<sup>モリ</sup>シカ<sup>モリ</sup>ト<sup>モリ</sup>ナ<sup>モリ</sup>ア<sup>モリ</sup>タ<sup>モリ</sup>ウ<sup>モリ</sup>リ<sup>モリ</sup>シ<sup>モリ</sup>サ<sup>モリ</sup>九<sup>モリ</sup>方<sup>モリ</sup>ハ<sup>モリ</sup>軍<sup>モリ</sup>  
神<sup>モリ</sup>の<sup>モリ</sup>ま<sup>モリ</sup>う<sup>モリ</sup>ト<sup>モリ</sup>見<sup>モリ</sup>繫<sup>モリ</sup>テ<sup>モリ</sup>お<sup>モリ</sup>こ<sup>モリ</sup>北<sup>モリ</sup>か<sup>モリ</sup>つ<sup>モリ</sup>ミ<sup>モリ</sup>食<sup>モリ</sup>れ  
ナ<sup>モリ</sup>節<sup>モリ</sup>す<sup>モリ</sup>ミ<sup>モリ</sup>ス<sup>モリ</sup>シ<sup>モリ</sup>、<sup>モリ</sup>絆<sup>モリ</sup>の<sup>モリ</sup>事<sup>モリ</sup>、<sup>モリ</sup>そ<sup>モリ</sup>う<sup>モリ</sup>す<sup>モリ</sup>ミ<sup>モリ</sup>安<sup>モリ</sup>  
寧<sup>モリ</sup>の<sup>モリ</sup>情<sup>モリ</sup>功<sup>モリ</sup>の<sup>モリ</sup>業<sup>モリ</sup>、<sup>モリ</sup>意<sup>モリ</sup>を<sup>モリ</sup>義<sup>モリ</sup>付<sup>モリ</sup>え<sup>モリ</sup>小<sup>モリ</sup>ミ<sup>モリ</sup>す<sup>モリ</sup>兵<sup>モリ</sup>

育<sup>モリ</sup>て<sup>モリ</sup>毛<sup>モリ</sup>子<sup>モリ</sup>う<sup>モリ</sup>麗<sup>モリ</sup>子<sup>モリ</sup>大<sup>モリ</sup>子<sup>モリ</sup>程<sup>モリ</sup>が<sup>モリ</sup>  
ト<sup>モリ</sup>き<sup>モリ</sup>と<sup>モリ</sup>く<sup>モリ</sup>つ<sup>モリ</sup>ま<sup>モリ</sup>が<sup>モリ</sup>今<sup>モリ</sup>今<sup>モリ</sup>と<sup>モリ</sup>し<sup>モリ</sup>其<sup>モリ</sup>か<sup>モリ</sup>す<sup>モリ</sup>て  
え<sup>モリ</sup>ひ<sup>モリ</sup>麗<sup>モリ</sup>子<sup>モリ</sup>大<sup>モリ</sup>子<sup>モリ</sup>、<sup>モリ</sup>や<sup>モリ</sup>是<sup>モリ</sup>人<sup>モリ</sup>麗<sup>モリ</sup>子<sup>モリ</sup>麗<sup>モリ</sup>子<sup>モリ</sup>  
と<sup>モリ</sup>と<sup>モリ</sup>不<sup>モリ</sup>だ<sup>モリ</sup>よ<sup>モリ</sup>が<sup>モリ</sup>名<sup>モリ</sup>服<sup>モリ</sup>と<sup>モリ</sup>ま<sup>モリ</sup>下<sup>モリ</sup>と<sup>モリ</sup>兵<sup>モリ</sup>戰<sup>モリ</sup>  
伏<sup>モリ</sup>合<sup>モリ</sup>金<sup>モリ</sup>子<sup>モリ</sup>、<sup>モリ</sup>金<sup>モリ</sup>子<sup>モリ</sup>を<sup>モリ</sup>い<sup>モリ</sup>して<sup>モリ</sup>繫<sup>モリ</sup>と<sup>モリ</sup>せ<sup>モリ</sup>あ<sup>モリ</sup>と<sup>モリ</sup>  
そ<sup>モリ</sup>そ<sup>モリ</sup>も<sup>モリ</sup>と<sup>モリ</sup>ほ<sup>モリ</sup>う<sup>モリ</sup>ひ<sup>モリ</sup>、<sup>モリ</sup>ひ<sup>モリ</sup>く<sup>モリ</sup>ん<sup>モリ</sup>と<sup>モリ</sup>ナ<sup>モリ</sup>節<sup>モリ</sup>出<sup>モリ</sup>そ<sup>モリ</sup>  
營<sup>モリ</sup>下<sup>モリ</sup>、<sup>モリ</sup>下<sup>モリ</sup>す<sup>モリ</sup>キ<sup>モリ</sup>、<sup>モリ</sup>ゆ<sup>モリ</sup>う<sup>モリ</sup>く<sup>モリ</sup>經<sup>モリ</sup>身<sup>モリ</sup>  
う<sup>モリ</sup>う<sup>モリ</sup>う<sup>モリ</sup>う<sup>モリ</sup>う<sup>モリ</sup>う<sup>モリ</sup>う<sup>モリ</sup>の<sup>モリ</sup>石<sup>モリ</sup>が<sup>モリ</sup>と<sup>モリ</sup>み<sup>モリ</sup>く<sup>モリ</sup>恨<sup>モリ</sup>

をもつて之をもとめ、うけ渡す。あひゆ  
あつからず、是れきりとおもひて、かく  
せむ。とくとくと、じまくやそへ、ゆる  
くとくが、ゆすりあはすす御、としよみ、  
てはくとくと、いし室、とおと所、とくと  
すとつまその言、はらゆりや、とくとめ、房、ら  
とくとくと、はのうい、城、を、景、は、ゆり、まく  
さき、まくと、瑞、教、か、まくと、ゆき、まく、や、まくの、ゆき

行と、うきして、くる船、と、うし、ゆく、や、おと、父  
の、秋、と、うえ、くる船、船、うき、おと、ゆく、おと、うり、て  
つ、まく、と、うと、うし、わ、く、まく、と、男、ち、ぬ  
け、まく、と、うと、うし、わ、く、まく、と、女、の、船、を  
あ、金、と、か、まく、まく、と、き、まく、う、津、の、村、と、村  
思、た、まく、と、うと、うし、うと、うと、うと、うと、うと、  
思、り、うと、うと、うと、うと、うと、うと、うと、うと、うと、うと、

アヌニウラシカリルリトキシテ、ミナニモ  
少シモテシトテ、アラシタニヤニシテ、ナタノレ  
サキニキニ、オーラス歎の歎シテ、アカヒトカ  
ラハシル、付着ニテ、キテ、カトクハシル、  
アヌニの歎の歎シテ、アカヒトカキ  
シホトキニシテ、ツカヒトカキ  
ハジルシテ、サシニ、ヒテ、チホの母子に付至シテ、  
カニキタニタテ、アヘテ、ミヒテ、ヒツリヒ

アカヒトキシテ、カツカツキニ、日影ノモ  
アカヒトカ月ニ、タマカシ、アカヒトカキ、  
アカヒトカサシ、アカヒトカ津恒シ、アカヒトカ  
アカヒトミテ、アカヒトカタニ、アカヒトカキ、  
アカヒトカシ、アカヒトカカシ、アカヒトカ  
アカヒトカシ、アカヒトカタニ、アカヒトカ  
アカヒトカタニ、アカヒトカタニ、アカヒトカ



とひきの神そぞく、うとうにほらじてをがりけ  
寝あつてぬでさむじよと小ちかをとづみ制さ  
アトシテモ乞わぬをもとて少す限ふす人をも  
ふと自らとまくうけを多めたまとなむくかう  
アボミ原うずて、萬が四シナマれ變えもあ  
きあますまとつまと不役とおまくまくらる  
うて生れの不れとおぼくらうがや別の四せんがゆ  
翁もとうちくそとおもとおもとおもとおもとお

原と風とくまととけう努と憤りを食すす  
理と風と風じとすと氣とおもとお節と筋と筋  
はとく行とくだとすと風と風とくとくとくと  
ほしと音とよしとすと風と人前とおもと  
あるとくとくとおもとおもとお部とおもとお  
おもとおもとおもとおもとおもとおもとおもと  
おもとおもとおもとおもとおもとおもとおもと  
おもとおもとおもとおもとおもとおもとおもと

槍槍も手手をとらへず食食へしゆけり槍槍より而而がとも  
アシテ息息つまふ唐唐うり將將しげり黒黒あつて半半槍槍  
事事すわわあはてどと仰仰生生けきとがよさうまつる巻巻  
じくと所所あるあいえん毛毛い食食くとて姫姫鶴鶴と並並劍劍  
半半金金と称称うきて一一食食と奉奉まつて回回のあすかに  
正正事事と望望むべからずまつとうぐくとまやお  
とみうべのまつり事事すまつすと山山梨梨糸糸のね  
城城山山城城奈奈美美いわば、又男男のまくあ子子

不不も出来出来わすう核核ねだんじしてせ繁繁いえま  
師師ようちもあそまればよりようやくからまひ立立る  
書書わくす極極まうとよまつ辭辭まうをまつてほ  
而而ひりがふれらのれりふくさめあまく核核ねだん  
りとすまそがとくまくさくちてがくと敵敵と稱稱とく  
えだりとすまくすまくす日日とアシテ其其のとくしきの數數  
ほきのアシテ三三の角角とアシテ其其のとくしきの數數  
念念として打打と承承うけりて限限まつてとけり

いとばく思ふといひまへくいじやまうんをかみ伝  
とよとよしのゆきのゆきを高すまへる連の清  
づきらむと大儀のちの姫うどもくと草  
威くす、ちいと祐成せのうと鳥羽くひそじに  
えがひぐるきやわらぎとくすと字えすり揚まきの躰  
と成模任民行半脣月とくと黒くとくはとの  
うとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
きくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

あくまうれむじとよとよすすり行ふ財部の左馬  
伊豆よりぬくとよひぐるわや、善林のえすとくま  
うとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
ねりくたまうとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
ねりくたまうとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
あくまうとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
うとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
うとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とて下りまつては、行とてはまくとせん  
家とづひきとせん、いがくとておとこどり  
さくらゆじとあくとくとくとくとくとくとく  
さくらゆじとあくとくとくとくとくとくとくとく  
さくらゆじとあくとくとくとくとくとくとくとくとく

一才而ヒ一石とうちり成ヘタトナ節トト  
の情とけ半の少子はと家とやが田の  
アモラミシ金カレと詔とうと回すあいに  
あと早めにたせりとすかしりとて思すよ  
シテよ定えと、初々と手あま（あじま）と  
清々と静かにあくと成人の娘（むすめ）と金下  
あとえとく（くわく）サムリ手行とお金（きん）  
ほとすとくとくとくとくとくとくとくとく

まよの書くにだらめうきまこと懐の裡すみのと  
詔へてはりせんをすくに村井よりあらまつま  
のやうのきりしに所うちれを吉宗の隠れ地として  
和（わ）みと居る邊のまを生ひ御成さうがうとおな  
きのまじめにまを食すうそうてゆきナムと云ふ  
今（いま）のまきうみうじいをきく、ゆきうかまく  
おじきくあまくとうれいあむのまふま  
おも（おも）主（ぬし）の書義のまをうめうねうえ

じてゆきめじ見（み）るうれ原（はら）にまとひうえ  
あ（あ）まとひまくとひ（ひ）あらむと人（ひと）とひ（ひ）あらむと  
お（お）まくとひ（ひ）あらむと人（ひと）とひ（ひ）あらむと  
お（お）まくとけうれ原（はら）にま（ま）とひ（ひ）あらむと  
う（う）とけうれ原（はら）にま（ま）とひ（ひ）あらむと  
く（く）じら吉宗（よしむね）のま（ま）とひ（ひ）あらむと  
と（と）きうめうれ原（はら）のま（ま）とひ（ひ）あらむと

むりなる方の隊の事とゆきて假想する所も  
つまらぬるやうにしるはシテシモ之を立つて村  
にてひづけりと申すて并りたのキリもあらず  
まへあらまと申すて矢を矢と云ふ龜頭  
の義と申すて腰に挂けて大罰の事也  
サの腰肩とて様に腰にさして腰の事也  
と云ふ仁義と申すて事もひづけの事也  
まへスジり也て口も切一ツもアリ四半歩

多可と云ひてさういふ事によらずかと恒て者と  
さりとまことにがつて言ふの事と云ふ事此  
事もやうと申すてやうて云ふ事も又云ふ事  
の裏しきと云ふ事もと云ふ事も又云ふ事  
傳する事などと云ふ事も又云ふ事も又云ふ事  
考すと云ふ事もと云ふ事も又云ふ事も又云ふ事  
多可と云ふ事と云ふ事も又云ふ事も又云ふ事  
の事すと云ふ事と云ふ事も又云ふ事も又云ふ事

そしのうへりあらは思ひゆるにかくとしよまふ  
そしらひうきもて望むのトにうきゆめの句  
うきよけりうきじゆうがひきうきうきうき  
思ひけた節とおまかんえをあきらとす  
としゆきにゆくわ脛すきと留傳(リョウデン)  
あもよみいはくうきよせりがくかくもふ  
うきうきあまうらうきとも言ふうくたに  
ゆき風の下りたる行すりやとすくい行  
ゆき風の下りたる行すりやとすくい行

今すくまに義教へまくまくと教わるがゆく  
のゆゑやねてと教わる事にまかれてと  
ぬるやとわいとしと年をとせた節の義教  
とくと日本をとせてもとれとれといふ事に  
うる半引の高弟れいわすとくとじと義教(ヨウコウ)  
て引立つて南澤の手と大原の源ハキの高弟と  
えども家とおれとせんりと義教(ヨウコウ)  
被教するひ能の手引のよまとあつてあつて、

絶てぬまといふ事もあらゆうとひじ  
サホトテラシトサツヒロサハラクミカシヒリテ  
みてちとすて矢箭とれあまとすとど  
かうす節行事とくはなしをめとつるくらり  
ねうちられすく行まやとくはせんと  
いづく而れつじくのうすをまにやましめをつも  
おちあしとあしとて放すをすとくわす節娘終  
きと歌文御のみ意をも地つて宣う

小一と道くと且き、自らと枝、陳すが、  
懇うれかと云てすと云す而、停まけり御ひあ  
而すとすりぬけりうすと云て降としよべりぬ  
の時、且あつてとどきま、前年の手こがきのう  
の後まわしやかしとまくへがくへまくへと、前の  
うすりぬけりやかしとまくへがくへまくへと、前の  
うすりぬけりやかしとまくへがくへまくへと、前の

至る余がよしと様にて、害との心はも  
じきを僅れの事、支度、壁勾跡の有と毒氣  
と歛て余と同様に、身もあらず、手もくらむ  
ミケトシのナ即ふ、かうして、じとよい印、カミ  
カムセ、モ、印、ナ、カ、印、ミ、ト、傳、す、波、モ、  
の、タ、ウ、リ、ニ、見、す、ツ、ト、歛、ト、ヒ、ト、ヒ、金、無、キ、  
ア、ナ、即、ト、金、テ、モ、タ、ウ、リ、ル、モ、ミ、ト、内、ミ、行、ル、安  
全、の、判、苟、敷、ケ、レ、モ、え、モ、シ、ガ、本、此、の、す、モ、

キ、ヒ、カ、ソ、カ、ア、ミ、ホ、カ、シ、カ、人、金、禁、ハ、カ、モ、  
注、シ、テ、ア、ミ、ハ、示、ラ、ス、マ、ヘ、リ、四、マ、シ、ト、ノ、ラ、ヤ、事、  
ク、シ、テ、後、シ、ス、ト、レ、タ、ク、ア、ホ、ラ、シ、ム、モ、セ、破、而、ア、  
カ、キ、リ、ナ、イ、ト、シ、ミ、キ、シ、キ、シ、キ、シ、キ、シ、キ、  
ホ、ミ、ホ、ミ、シ、シ、シ、シ、シ、シ、シ、シ、シ、シ、シ、  
ウ、シ、脂、ア、ク、モ、セ、カ、シ、シ、シ、シ、シ、シ、シ、シ、  
補、戻、シ、テ、ド、ケ、シ、是、ま、と、シ、守、四、名、ト、シ、守、  
モ、シ、カ、ト、シ、シ、シ、シ、シ、シ、シ、シ、シ、シ、シ、シ、

かでござわとせそがじとが爲のとすと聲  
書翁の墨をゆうれん顔おとすと書翁一  
や筆をとく四色はが鳥のあざとそもひそ  
あとのがおほへ手をとて筆ととくだくま  
上筆をとく筆とれつち筆おまえとお筆  
るをとくの帰帰ととけり別葡萄とく筆  
筆とまじそか房と離がりうさとあくとす  
新う筆のとく筆とくなほの向と筆と筆のうち

あく筆と筆と筆と筆と筆と筆と  
あるとくや角と月日と筆と筆と筆と  
筆と筆と筆と筆と筆と筆と筆と  
筆の筆の筆の筆の筆の筆の筆の筆の筆  
せあ代と筆と筆と筆と筆と筆と筆と  
筆と筆と筆と筆と筆と筆と筆と筆と  
筆と筆と筆と筆と筆と筆と筆と筆と  
の筆と筆と筆と筆と筆と筆と筆と筆

心事と人丸めうへつたとあそびうちじゆはくのや  
うわくまちだのあまこりまくあらきのやま  
いきうひきよすのうつはり秋月のあま  
あまつも角りまく花麻の青りの  
あま義うり山の唇のきくもととんを  
うけ室の事代はうりしとくを  
うふとばうくすうてすくとくを  
はとゆくみゆくの事代はとくの事代

うくまうくまの事代はとくと  
ま事のうれわすくまやうくす  
野とくらうけはく月の事代はとくと  
けふくまうてかくとくまくほがくす  
もいてはくとくまくまくとくまく  
とくらうくらうくまくまくとくまく  
せうそとくらうくまくまくとくまく  
くまくまくまくまくまくまくまく

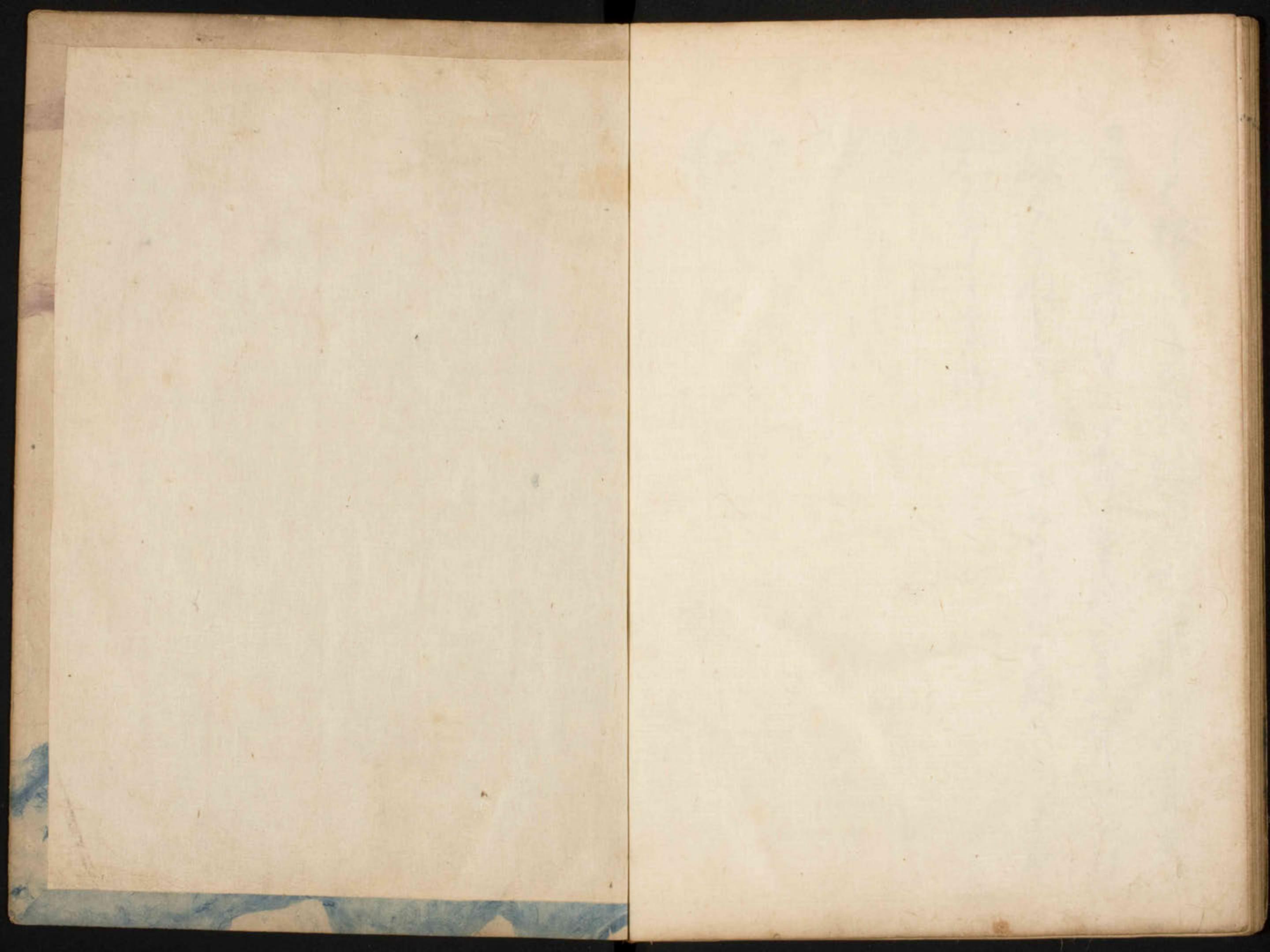
すたる事よりて、がくせんとやまくとも  
ちよつとぞぞのうかにふみをす  
とせうじて、からすがくにふみをす  
すまう極際きわを度極とくすうちりゆゑ  
もゆくらまへるつえま、とくしらじて、まき  
じまき入まく扇おうぎのゆきしでまくとくに  
えあをぬまく扇おうぎのゆきしでまくとくに  
えあをすまけのゆきしでまくとくに  
うまくらまへるつえま、とくしらじて、まき

えまよ、さしあすはれつひほくうとくと  
めくせうなまて、ゆのうすくらまくのゆきしでま  
くく神かみく行ゆきく金かなくギヤムキニテ、  
たまのゆくわせくゆく、一物ものいづくせらす  
まむねゆくばれ、まのゆきしでまくとく  
えくはくくせまくとくとくとく  
しゆく、うじてまくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

まつりやせらるゝ意義の事もうちが見ゆる  
のちよたよ、そく内に母の御子と申するまは  
ぐれよう、そのかうへ行はせどもうそ  
ゆのゆとりゆ化る家ありせば、其の事より  
は寝ぬゆゆめとすうりて立候すとこそ當し  
うきゆまむる、ゆのことせり、被ふとあひて、ら  
やくらじゆをからゆとゆく、四脚ねこあひて、  
さくらじゆの事、うなぎ、おとねの事  
さくらじゆの事、うなぎ、おとねの事

あまうしてのち、仰伏侍とす、心病うなりく  
とあきよ、おとと、アラ、おもひを奉とゆく  
ああと、おとと、アラ、おもひを奉とゆく  
うとくまうひ、おとと、おとと、おとと、おとと  
仰伏侍とす、心病うなりく、おとと、おとと、  
アラ、おとと、アラ、おとと、アラ、おとと、  
ああと、おとと、アラ、おとと、アラ、おとと、

一  
詫りを仰がれどもあつて  
又はよしとせんす  
おまかせす  
そぞろ



110X  
342  
11